

令和五年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限

国 語

(その一)

注意 解答欄は問題用紙の(その五)・(その六)にあります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

効率という言葉が正義になってしまったのは、いつの頃からだろうか。新幹線から食堂車が消滅したときも、その理由は効率云々だったと記憶している。できるだけ多くの客を乗せて運行した方が、経済的に実りが多いという事情はわかる。だが、在来線の特急も含め、食堂車が姿を消してしまった日本の鉄道の旅からは、なにか大きなものが失われたという感がある。

① 本の読み方にも同じことが言える。かつて速読はひとつの芸でしかなく、一般的な読書の姿勢ではなかった。しかし、効率最優先のこの時代では、俄然正統派の位置を占めつつある。メールやSNS、ゲームなどで忙しい若者たちだけではなく、腰を据えて人生の味わいを感じすべき壮年層にもこの傾向は見られる。一冊の本とゆっくり向かい合う時間が、現代の日本列島で暮らす人々からは失われつつある。本を読むなら速読が好ましいし、名作を知るなら、五分で粗筋がわかるダイジェスト版がツゴウ良いのである。

速読が効率的であると主張する人々には、二つの理由があるようだ。書かれている知識を吸収するのにちんたら時間をかけているのはバカらしいということ。もうひとつは、脳のカッセイ化である。スピーディーに文字を追うことにより、カンフル剤でも打ったかのように脳が働きだすという理屈だ。

② どんな読み方をしようと自由だから、速読を否定しようとは思わない。ただ、読書は、知識を吸収することだけが目的なのではない。テレビ、映画、ゲームなど、映像を受けとめるばかりの脳の使い方とは違い、読書は書かれた文字をもとに、脳内に光景や論理を立ち上がらせる創造行為である。書く側の創造と読む側の創造があって、読書は初めて成り立つのだ。速読に挑まずとも、頭のなかに像を結ぶ丁寧な読書ができるなら、脳は十分に喜んでいるのではないだろうか。

③ ボクが大学の教員として学生たちに勧めているのは、極めてゆっくりと味わう読書である。自分では、「扉をあける読書」と呼んでいる。

たとえば三年生のゼミ生の場合、前期は日本戦没学生の手記『きけ わだつみのこえ』(岩波文庫)とベトナム戦争時の米兵の手紙集を交互に読む作業になる。後期は収容所を生き延びた心理学者V・E・フランクルの『夜と霧』(みずす書房)が必修の一冊だ。これらを一ページずつ大切に、じっくり読んでいく。学生たちにとって難解な言葉があれば、それを調べてもらい、その発表を交えて、同じページを繰り返して読む。

この行為により、読書は各自のなかでどんどん深まっていく。特攻隊員のイシヨに記された「自由主義」という言葉から、「京大滝川事件」や「天皇機関説」が現れる。「クロオチエ」や「ポアンカレ」などの人名が飛びだし、文学座の「わが街」や賢治の「鳥の北斗七星」も登場する。それらを学生たちは調べたり、読んだりする。すると、文字の奥に隠れていた当時の日本の空気というものが浮かび上がってくる。同時に、本当は死にたくなかった学徒兵たちの気持ち伝わり、二〇〇〇年生まれの子供たちもふと心のなかで立ち止まる。④ 眼差しが新たになる。

速読の時代に、なぜボクがこのような遅読を勧めるのか。もう一つの理由は、書物と世界には垣根がないという見方をしているからだ。書物のなかに扉を見つけ、それをあけることによって一ページ内の表現に深く入りこんでいくという精神的行為は、実に、世界の積極的な再構成に他ならない。ボクらが暮らすこの社会にも無限の扉があり、それらはふだん隠れているのだが、「扉をあける読書」を経験した者なら、効率主義の人よりはきつと見つけやすいのである。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語 (その二)

最寄り駅から大学キャンパスまでの道。これをただ歩くのではなく、扉を見つけるように進みなさいとボクは学生たちに言う。どれだけの種類の草花に会えるのか。どんな小鳥の声が聞こえてくるのか。通行人を守るガードレールを発明した人はだれなのか。通りに一店舗てんぽを構えるならどんな業種④が喜ばれるのか。その扉をあけ、自分なりの答えを見つけることにより、道は日々新たになる。世界は更新こうしんされる。

といった主張をすると、「それで、どんな教育効果がありましたか？」とよく尋ねたずられる。そんなことは、わかるはずがない。扉をあけることの豊かさを学生たちが実感するのは、十年、二十年、あるいはもつと先かもしれないのだ。【】はあまりよくないのである。

(ドリアン助川すけがわ「扉をあける読書」)

問一 波線部㉞㉟のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

- ㉞ ツゴウ ㉟ カッセイ ㊱ 手記 ㊲ イシヨ ㊳ 業種

問二 傍線部①「本の読み方にも同じことが言える」とあるが、「同じこと」とはどういうことか、本文中の言葉を用いて答えなさい。

問三 傍線部①「本の読み方にも同じことが言える」とあるが、本の読み方において失われたものは何か。本文中から十六字で書き抜きなさい。(句読点、符号なども字数に数えます。以下同じ。)

問四 傍線部②「読書は、知識を吸収することだけが目的なのではない」とあるが、筆者は「読書」をどのようなものと考えているか答えなさい。

問五 傍線部③「自分では、「扉をあける読書」と呼んでいる」とあるが、「扉をあける読書」とはどういうことと筆者は考えているか。それがわかる一文を本文中から取り出して最初の五字を示しなさい。

問六 傍線部④「眼差しが新たになる」とはどういうことか。「くすることによってくなる」という形で百字以内で答えなさい。

問七 傍線部④「眼差しが新たになる」と同様の意味で用いられている本文中の言葉を八字で書き抜きなさい。

問八 本文中の空欄【 】にあてはまる漢字二字の言葉を本文中から書き抜きなさい。

令和五年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限

国 語

(その二)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ずっとむかし、ぼくたちはみんな、誰かが書いたお話の中に住んでいて、ほんとうは存在しないのだ、といううわさが流れた。

でも、そんなうわさは、しょっちゅう流れるのだ。

子どもたちにイジめられている海亀うみがめを助けて、そのお札にと、海の底にあるというお城⑦へシヨウタイ⑦されたことで有名ななった、元漁師は、うわさを耳にすると、

「それがどうした」といった。

「それが、仮にお話の中の出来事であろうと、わたしは、自分のしたことにプライドを抱いだいているし、同じようにまた、海辺で、棒で打擲ちやうりやくされている海亀を見つけたら、また助けてやるつもりだ」

そして、その老いさらばえた元漁師は、杖つえをつき、毎朝、海亀を求めて、湿った砂浜すなはまを歩いた。だが、そのさびれた岸に流れ着くのは、奇妙な文字がインサツ④されたラベルの瓶びんや、夥おびただしいプラスチックの屑くずばかりだった。そこには、いまや、海亀どころか、生きものの影すら見えなかった。もちろん、海亀をつつき回す少年などひとりもいなかった。

その元漁師は、天に向かって、杖を振り、「煙けむりが空に消え去ったとき、その煙と共に、若さも故郷も失ってしまったが、わたしは少しも後悔していない。どれも、なされねばならぬことばかりだったのだから」と叫んだ。だが、元漁師に応⑤えるものはどこにもいなかった。

それから、なおしばらく、元漁師が、ぶつぶつとなにかを呟つぶやきながら、脂あぶらじみた一枚の布のような服のすそを風にはためかせて、砂浜をうろつき回る姿が見られた。そして、ある朝、海に向かう、乱れた長いふたつの足跡と杖跡を残して、元漁師の姿は忽然こっぜんと消えたのだった。

あるものは、その元漁師はコウウン⑥にもまた海亀と出会い懐かしい海の底へと戻っていったのだといった。【A】、あるものは、確かにその元漁師は海亀を見たには違いないが、それは老いた脳裏④に浮かんた幻まぼろしであって、その幻を追いかけて、海へ入っていったのだといった。けれど、別のものたちは、小声で、【B】あのうわさは真実で、元漁師は誰かのお話の中の登場人物であり、彼の出番がなくなったので消え去ったのだといった。そして、そんなうわさを口にしたものは、例外なく、では自分はどうなのだと思います、胸の奥②に冷たいなにかを感じて、すぐに口をつぐんでしまうのだった。

それと同じころ、元漁師が消えた岸边から少し離れた森の奥で、一匹のオオカミが、深い懊惱おうのうにかられていた。それまで、オオカミにはなんの【X】もなかった。留守番をしている子ヤギたちの家のドアをノックして、怪あやしまれると、チョークを飲んでおかしな声を出したり、子ブタたちがつくった藁わらや木の家を倒たおして回るのは、楽しかった。あらしの夜に避難した山小屋で出会ったヤギと、仲良くなって旅したことも楽しかった。なんの不安もなく、野原を駆け回り、疲れると、小さな木の洞ほらの中で丸くなって眠ねむった。けれど、オオカミも、あのおそろしいうわさを、聞いてしまったのだった。

③ それをオオカミに伝えたのは、そのオオカミのことを嫌きらっていた別のオオカミだった。その、うわさを伝えたオオカミはメスだった。かつて、そのオオカミに好意を寄せ、冷たくあしらわれたことを深く恨うらんでいたのだ。だが、もしかしたら、そのメスオオカミは、愛と【Y】をはき違ちがえていたのかもしれない。とにかく、そのメスオオカミは、オオカミの耳に、不吉ふきつなうわさを流しこむことに成功したのだ。

受 験 番 号

令和五年度徳島文理中学校前期入学試験問題

第一限 国 語 (その四)

「そんなばかな」とオオカミは思った。「ぼくが誰かの書いたお話に出てくるオオカミだなんて！」
オオカミは自分の体を抱きしめ、それから思いきり匂いを嗅いだ。^④

「ほらここにいるのはぼくで、ぼくを支配しているのもぼくなのだ」

だが、ひとたび、オオカミのところに巣くった疑いは消えることがなかった。オオカミは、なにを食べても味がなくな
気がした。なぜなら、自分はほんとうは存在しないのかもしれないからだった。

(高橋源一郎『さよならクリストファー・ロビン』
たかはしげんいちろう)

問一 波線部㉞㉟のうち、漢字は読みを記し、カタカナは漢字に改めなさい。

- ㉞ ショウタイ ㉟ インサツ ㊱ 応(える) ㊲ コウウン ㊳ 脳裏

問二 傍線部①「なされねばならぬこと」として、適当ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 元漁師が海亀を助けたこと。 イ 元漁師の若々しさが失われたこと。
ウ 元漁師が海底を訪れたこと。 エ 元漁師の姿が消えてしまったこと。

問三 本文中の空欄【 A 】・【 B 】に入る適当な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えな
さい。(ただし、同じ記号を繰り返し用いてはなりません。)

- ア もし イ また ウ やはり エ ときどき オ いつも

問四 傍線部②「冷たいなにか」とあるが、これは何か。二十五字以内で答えなさい。

問五 本文中の空欄【 X 】・【 Y 】に入る適当な言葉を、次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えな
さい。(ただし、同じ記号を繰り返し用いてはなりません。)

- ア 楽しみ イ 憎しみ ウ おかしみ エ 苦しみ オ 慈しみ

問六 傍線部③「それ」とは何か。二十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部④「オオカミは自分の体を抱きしめ、それから思いきり匂いを嗅いだ」とあるが、なぜそうしたのか。七十字以
内で答えなさい。